

Title	特集 : ラーニング・アナリティクス最前線
Author(s)	浦西, 友樹
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2018, 18, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70425
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



特集：ラーニング・アナリティクス最前線

浦西 友樹（大阪大学）

私事ではあるが、筆者は先日アメリカ・フィラデルフィアで開催された EDUCAUSE Annual Conference 2017 に参加した。EDUCAUSE は高等教育のための情報技術に関するアメリカの学会であり、Annual Conference にはアメリカをはじめとして世界から多くの参加者が訪れる。技術展示には Apple や Microsoft などをはじめとして多くの企業が参加しており、情報技術をいかに高等教育に活用するか? という課題に対し、社会から強い関心が寄せられていることが伺えた。加えて直後に広島大学にて開催された「ラーニング・アナリティクスに関する技術交流会・研究会」に参加し、数多くの知見を得た。特に緒方広明先生（京都大学）による講演は、ラーニングアナリティクスを取り巻く最新状況について大変分かりやすく解説されたものであった。本稿はその講演をベースとしているものである。

ラーニング・アナリティクス (Learning Analytics、以下 LA) とは、学習教育の促進のための、学習教育データの収集および解析を指す。本学においても大阪大学 CLE を導入しているように、学習管理システム (Learning Management System) などの情報技術の導入により学習履歴の収集が容易になっており、LA への関心は高まっている。

LA を取り巻く状況は日々進化を続けており、例えばイギリスでは収集したデータを集めるためのインフラである JISC や、LA を推進するプロジェクトが進んでおり、50 を超える大学が参加している状況にある。またノルウェーにおいても、Bergen 大学により Center for the Science and Learning & Technology (SLATE) が設立されており、29 大学がメンバとなっている。これらのようなトップダウンの仕組みとは逆に、アメリカにおいては各大学が独立して LA のための基盤を構築しており、ボトムアップの様相を呈している。

翻って日本の状況をみると、日本の大学において全学規模で LA を実施している組織は九州大学のみであり、京都大学が後に続いているものの、日本全体としての取り組みとしてはまだまだこれからであると感じさせられる。では、日本においてはどのような仕組みを構築するのが有用であろうか。緒方先生は先の講演において、「日本においては大学の数が多いため、ボトムアップとトップダウン両方のアプローチが必要ではないか」としており、筆者も同感である。

今号においては、LA の最新動向を知るため、LA の研究を進めている先生方にご寄稿いただき、3 件の記事を掲載した。関西学院大学の武田俊之先生には、「ラーニング・アナリティクスと教育データ」というタイトルで、LA について解説いただくとともに、課題や注意すべき点についてまとめていただ

いた。また、京都大学の梶田将司先生には、「Computational Higher Education \cong Learning Analytics」というタイトルで、京都大学における教育の情報化に関する最新動向について解説いただいた。さらに、九州大学の島田敬士先生らのグループには、「授業外学習支援のためのデジタル教材の自動要約」というタイトルで、ご自身のグループの研究について紹介いただいている。

本学においてもデータドリフトフロンティア機構が2016年に発足するなど、データサイエンスに関する研究は熱を帯びている。加えて、LAに用いられる学習データは多様な種類のものがあり、例えば筆者の周辺では画像処理の研究者がLA分野に参入するなど、LAという研究分野において研究の横への広がりが進んでいる点も見逃せない。本特集が読者のLAへの理解を深めるとともに、さらなる研究の発展へのきっかけとなり、多くの議論を生む種となることを望む。

・ラーニング・アナリティクスと教育データ	武田 俊之	5
・ Computational Higher Education \cong Learning Analytics	梶田 将司	11
・ 授業外学習支援のためのデジタル教材の自動要約		
	島田 敬士、大久保 文哉、殷 成久、緒方 広明	17